

氏 名 (本籍) 戸 沢 充 則 (長野県)
TOSAWA Mitsunori
学 位 の 種 類 文 学 博 士
学 位 記 番 号 文 第 5 号
学位授与の日付 昭和42年9月25日
学位授与の要件 学位規則第5条第1項 (課程博士)
学 位 論 文 題 目 先 土 器 時 代 文 化 の 構 造
外 国 語 訳 STRUCTURE OF THE PRECERAMIC CULTURE IN JAPAN
論 文 審 査 機 関 文学研究科委員会
論 文 審 査 委 員 (主査) 杉原莊介 (副査) 斎藤忠・関野雄

「先土器時代文化の構造」要旨

第 1 部

I 研 究 史

- 1 岩宿遺跡発見以前の学史的動向
- 2 岩宿遺跡の発見と石器の編年
- 3 編年の研究の現段階

II 方 法 論

- 1 先土器時代文化研究の基本的方向
- 2 先土器時代文化の構造理論
- 3 先土器時代文化研究の基本的な概念としての石器文化

第 2 部

III 先土器時代文化における石器の形態と型式

- 1 石器分類に関する2, 3の問題
- 2 剥片剥離技術について
- 3 石器の形態と型式の分類

IV 石器文化の諸類型と様相の成立

- 1 単一組成の石器文化
- 2 複合組成の石器文化
- 3 石器文化の類型化

第 3 部

V 先土器時代文化の構造

- 1 様相の成立
- 2 諸様相の関連 ―階程の成立―
- 3 先土器時代文化の動態

1 論文の趣旨と目標

ヨーロッパの上部旧石器時代 (Upper palaeolithic age) に相当する。日本の先土器時代文化の研究は、1949年に明治大学考古学研究室が実施した。群馬県岩宿遺跡の発掘調査によつて開始された。以来、20年にちかい研究史を重ねて、全国で発見された遺跡の数は500カ所をくだらず、その研究と報告のために費された文献も400篇をこしている。戦前戦後を通じておこなわれた日本考古学の分野の中で、最大の成果の1つとしてとりあげられる理由である。

しかし、そうした莫大な研究成果の蓄積をいま回顧してみると、そこには研究の方法のうえで、幾多の反省すべき点のあることに気づくのである。

第1に、石器の年代的先後関係を決めることだけが、あたかも研究の目的であるように錯覚した「垂流編年学派」的ないき方がかなり濃厚であつた。そうした研究のなかには、考古学が歴史学であるという自覚に欠けたものが多い。そのために、本来、人類の進歩のために重要な生産用具であるべき「人間の道具」としての石器が、時代の新古をきめる自然科学的（古生物学・地質学的）な「標準化石」のように扱われるという傾向を、最近まではとくに強くもつていた。

そのことは、研究史の初期の段階で、シンプルな形で先土器時代文化の体系をひとまず作るためには役立った。しかしその後、資料は急速に増大し、内容的にも複雑な石器文化が発見されるようになって、単純な、編年学的方法だけにたよる体系では、先土器時代文化の全般にわたる体系化も、そこからひきだされるべき、先土器時代文化の構造上の諸問題を理解することは不可能にちかい。研究の方法が、積極的に反省されるべき時点に、現在の研究は到達しているのである。

この論文の最大の目標は、先土器時代文化の正しい体系化のために、今後どのような方法がとられるべきかを検討し、先土器時代文化の構造を、まず理論体系として確立しよう。

2 先土器時代文化の構造試論

先土器時代文化の構造を明らかにする基礎的な資料は、石器である。ごくまれな例をのぞいて、石器はけつして個々に孤立しては存在しえない。複数の石器が一群をなして、1つの遺跡から発見される。そこには、ある形態をもつた個々の石器の集合とはちがう、ある関係が生ずる。そうした関係をふくめて、考古学にそれを「石器文化 (industry)」という概念でとらえたい。

石器文化はそれ自体で、先土器時代における、最小の1つの生活共同体の反映である。それゆえに、先土器時代文化の構造を支える最小かつ基本的な単位である。個々の石器文化のあり方を明らかにすることは、先土器時代文化研究のもつとも基礎的な使事である。

このような石器文化もまた、単独には存在しない。複数の石器文化の相互の関係は複雑であり、多様

である。しかし、原則的には、時間的にはほぼ同一で、地域的にある一定の分布をもついくつかの石器文化群と、地域的にはほぼ同じ分布をもち、時間的な差をもつ石器文化群という関係でとらえられることが多い。そうした2つの関係が相互に有機的なつながりをもち、かつ地域的にも時間的にも小さくとも小さい単位でまとめられるもの³を求めれば、空間的に一定のひろがりとし、時間的に一連のつながりをもつ石器文化の一群を「様相(Museums)」という概念でとらえられよう。

おそらく、この様相の概念の中にふくまれる単位は、互になんらかの関連と、同じ技術上、文化的な伝統を背負った、地縁的な部族といったような、人間集団または社会集団を反映するものである。それは、共通の石器の原材を供給しうる地域圏、同じ食糧資源を獲得しうる生態圏の中に限定される可能性がある。したがって、そうした様相の変化をもたらす動因は、かなり大きな歴史的な動きとして理解する必要があるだろう。

かつて、中部・関東地方を中心として考えられてきた「鼓打器文化」から「細石器文化」にいたる、いわゆる先土器時代文化の編年がおこなわれた。その変遷が、この地域において正しい体系であり、また、その「文化」の名を形容する主体的な石器の単なる出現序列ではなく、真に様相として把握された、一連の石器文化群の編年であるなら、この地域には、きわめて伝統的に強固な地域的な文化が形成されていたことになる。こうした一定地域において、段階的にみられる諸様相のつながりを「地域文化(Culture of Area)」という概念でまとめてみたいと思う。この地域文化が、もし狭い日本列島の先土器時代にみとめられるとしたら、それを形成した主体者は、すでに「部族」のカテゴリーをこえた人間集団であつたとみるべきであろう。

地域文化が成立する度合は、歴史的な大きな波の有無によつて左右される。地域文化をこえて、汎日本的な文化が生まれる過程は、時代が変わる過程である。その存在が十分に予想される、いわゆる「下部旧石器時代」的な石器文化が確認されたとき、われわれは「時代(文化)」を異にする、より古い先土器時代文化を語ることができよう。そして、有茎尖頭器や土器の出現で示される。先土器時代文化終末、縄文時代文化発生の事情は、まさに新しい「時代(文化)」への変化の過程にふさわしい歴史事象としてとらえることができるであろう。

かくして、先土器時代文化は、その基礎的な資料としての石器を、歴史的な時代(文化)の概念にいたるまで、構造的な発展の姿とし追求することによつて明らかにしうるという体系的概念の指定を試みた。それらの諸概念が科学的な内容をもつためには、それぞれの概念が成立する諸条件を、より具体的な方法として考えていかなければならない。

3 先土器時代文化の石器の形態と型式(次表)

4 先土器時代文化における石器文化の類型

「石器文化」とは、一遺跡の一文化層から発見された全資料と、その構造的関係をふくめた、先土器時代文化研究のための基礎的な概念である。全国に分布する多くの石器文化は、それにふくまれる石器群の形態組成にもとづいて、次のように類型化される。

類型A：敲打器を主体的な石器とする単一組成の石器文化(岩宿I)

類型K：ナイフ形石器を主体的な石器とする単一組成の石器文化（大隅・横道・金谷原・東山・山屋・横前・杉久保Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ・神山・伊勢見山Ⅱ・茂呂・茶白山・砂川・市場坂・御小屋久保・雪不知・池端前・平沢良・百花台Ⅱなど）

類型KP：ナイフ形石器と鎗先形尖頭器からなる複合組成の石器文化であるが，量的にはナイフ形石器が中心をなす石器文化（上ヶ屋・手長江・治部坂・柳又A・鷺羽山など）

類型PK：量的に鎗先形尖頭器が主体となる。ナイフ形石器，鎗先形尖頭器の複合組成の石器文化（平林・渋川ⅡA・渋川ⅡB・武井Ⅱ・八島・鷹山？男女倉？など）

類型P：鎗先形尖頭器が主体をなす単一組成の石器文化（曲川・立川Ⅱ，Ⅲ・射的山・大関・越中山A・長者久保・中林・本ノ木・横倉・北踊場・古屋敷・上ノ平・神子柴・多久・三年山・茶園原など）

類型PM：鎗先形尖頭器と細石器を主体とする複合組成の石器文化で，組成のうえで両者の占める比重がほぼ同じ程度の石器文化（白滝32地点，30地点，33地点，服部台，峠下？タチカルンナイ？）

類型MP：細石器の占める割合が圧倒的に大きい，鎗先形尖頭器と細石器の複合組成の石器文化（置戸安住A・紅葉山・福井4層など）

類型MK：細石器を主体とする組成のなかに，わずかにナイフ形石器をふくむ石器文化（中上・休場など）

類型KM：ナイフ形石器と細石器のもつ比重がほぼ等しいか，ナイフ形石器がやや優勢とみられる石器文化（笹ノ尾・日出松・枝去木・佐世保市周辺遺跡・井島？・鷹山？・男女倉Ⅲ？など）

類型M：細石器を主体的な石器とする単一組成の石器文化（札滑・緑丘B・立川Ⅰ・広郷・常川・荒屋・矢出川・福井2・3層など）

5 先土器時代文化の構造と動態

日本の先土器時代文化がいかなる経緯をもつて出現したかはいまのところ明らかではない。

ナイフ形石器様相が，北海道でもなく九州でもない。列島中央部の東北地方と中部地方に典型的に発生しているという現象は，それらの地域で，より古い伝統をもつ階程のなかから生まれてきたものだという推定を許すであろう。現在，その片鱗ともいえる中部敲打器様相は，資料にきわめてとぼしい。いつそうの追求がまたれるゆえんである。

より古い資料が確実にとらえられ，それが1つの体系を与えられたとき，はじめてわれわれは，日本的な先土器時代文化の発生の姿を，より広い視野から展望することができるであろう。

鎗先形尖頭器の様相は，明らかにナイフ形石器の様相のうえに発生した。それは厳密には，東北地方と中部地方とで，ほぼ同時に達成されたというべきであるかもしれない。東北地方から中部地方にかけて，ナイフ形石器の階程の終末期には，さまざまな構造的変化といえる現象がみられるようになる。それは，先土器時代文化の地域と時間をこえた動態として，型的変遷の形態変化への転化の現象として，まさに典型的な構造変化の実相を示しているとみるべきであろう。

日本における細石器様相の成立には，おそらくいままではいほど強く，周辺地域の影響があつたも

のと考えられる。細石器様相の発達が、日本列島の両端にあたる九州と北海道で典型的にとらえられることは、決して偶然ではない。相前後して、南北両地域に発生した細石器様相は、その初期の段階に、早くも中部地方を境とする東西両日本に拡散した。

細石器階程にみられる列島の両極における先土器時代文化の動態は、単にそこが大陸に近いという地理的環境や、海峡がつながるといつた地質学的事情、それにとともなり生態圏の変動といつた原因だけで説明すべきではない。それは、新しい時代（文化）を迎える先土器時代文化の、もつとも大きな構造変化の萌芽であつた。

こうした先土器時代文化の動態が、人間のかかわりある問題として、いかなる動因によつてもたらされたか。その真に歴史的な叙述をおこなうには、なお時日を要する。とはいえ、ここにわずかに明らかにした先土器時代文化の構造は、そうした目標への1つの出発点になり得るものと確信する。

先土器時代文化の石器分類一覧表

- 1 「下部旧石器」的な敲打器
- 2 敲打器 楕円形石器（岩宿型・その他）
- 3 " 局部磨製石器（茶臼山型）
- 4 " 大形局部磨製石器（神子柴型・長者久保型・モサナル型）
- 5 " 大形粗製石器（礫器等）
- 6 " 槌状石器（棒状石器・磨石等）
- 7 ナイフ形石器 1 - a 先端をもつ刃器の基部調整（成田型）
- 8 " 1 - b 典型的な柳葉形，調整部分少ない（杉久保型）
- 9 " 1 - c 柳葉形・やや不整形，小形品を含む（金谷原型）
- 10 " 1 - d 大形，調整少なく素材の形を残す（東山型）
- 11 " 2 - a ペンナイフ形，急斜の刃潰剥離発達（茂呂型）
- 12 " 2 - b 柳葉形，基部の片側裏面に調整（砂川2 a 型）
- 13 " 2 - c やや大形，刃部短かく直線的（砂川2 b 型）
- 14 " 2 - d 刃器状の素材を切断整形（御小屋久保型）
- 15 " 2 - e 剥片を僅かに整形，やや不定形（渋川ⅡA型）
- 16 " 2 - f 柳葉形，小形厚手，調整剥離発達（渋川ⅡB型）
- 17 " 2 - g 木葉形，刃潰剥離顕著，大形多し（平林型）
- 18 " 2 - h 翼状剥片をもちいる（国府型）
- 19 " 2 - i 横剥剥片多用，切断手法少ない（宮田山型）
- 20 " 2 - j 小形柳葉形，半月形をなす（井島Ⅰ型）
- 21 " 2 - k 小形，細石器的，形状多様（伊良字根型）
- 22 " 3 - a 形態未分化の切出状石器（茶臼山型）

2 3	ナイフ形石器	3 - b	斜直線的な短かい刃，全体に大形（市場坂 3 型）
2 4	"	3 - c	横剝，横位使用の素材，やや小形（岩宿Ⅱ型）
2 5	"	3 - d	刃に接する側縁に notch 状凹み（手長丘型）
2 6	"	3 - e	調整剝離が器上面におよぶ（渋川Ⅱ A 型）
2 7	"	3 - f	小形，最も定形化した切出状石器（伊勢見山型）
2 8	"	3 - g	台形様石器（枝去木Ⅰ～Ⅴ型，百花台型）
2 9	"		不定形，大形，切載専用（第 4 形態）
3 0	"	5 - a	先端を斜断した刃器（砂川 5 型）
3 1	"	5 - b	やや短小，先端をもつ例もある（市場坂 5 型）
3 2	"	5 - c	巾広短小，調整加工部分多い（雪不知型）
3 3	"	5 - d	両端切断，四辺，三角，半月形など（池端前型）
3 4	鎗先形尖頭器	a	片面，半両面，ナイフ状刃部あり（武井 a 型）
3 5	"	b	片面，半両面調整，巾広，短小，部厚（武井 b 型）
3 6	"	c	半両面，やや大形，柳葉形，木葉形（武井 C 型）
3 7	"	d	巾広木葉形，周辺調整を主とする（平林型）
3 8	"	e	半両面多い，左右不均齊，肩あり（渋川Ⅱ型）
3 9	"	f	先端のみ加工，部厚く粗雑（八島型）
4 0	"	g	粗い両面調整，中形で木葉，柳葉形（馬場平型）
4 1	"	h	発達した両面調整，中形主体（北踊場型）
4 2	"	i	大形，調整精巧（横倉型，神子柴型，多久型）
4 3	"	j	有茎尖頭器
4 4	細刃器（細石）	a	粗製舟底状，湧別技法による素材（札滑型）
4 5	"	b	精製，舟底状，擦痕打面，湧別技法あり（白滝型）
4 6	"	m	精製，舟底状，調整打面，打面傾斜顕著（蘭越型）
4 7	"	d	舟底状，蘭越型類似，水平打面もある（日出松型）
4 8	"	e	扁平で半円筒形，両端打面あり（鷺山型）
4 9	"	f	半円錐形，平担打面多し，やや不定形（矢出川型）
5 0	"	g	粗製，半舟底状，平担打面（福井 4 層型）
5 1	"	h	やや精製，半舟底状，「西海技法」（福井 2・3 層型）
5 2	"	i	完全な円錐状，調整打面（置戸型・野岳型）
5 3	搔 器	a	刃器を素材，長い大形品多い（置戸型）
5 4	"	b	刃器を素材，短かくやや小形品多い（立川型）
5 5	"	c	拇指状，円盤状でやや小形（上ノ平型）

56	搔	器	d	いわゆるマイクロスクレイパー（曾根型）
57	"		e	不定形の素材をもちいたもの（御小屋久保型）
58	"		f	舟底状搔器，大，中，小形，特殊形あり
59	彫	器	1-a	平ノミ形，交叉する樋状剝離（置戸安住a型）
60	"		1-b	やや小形の平ノミ形，周辺調整あり（立川型）
61	"		1-c	折れた素材をもちいる（置戸安住d型）
62	"		2-a	典型的な角ノミ型（置戸安住b型）
63	"		2-b	小形の角ノミ形，周辺調整顕著（荒屋型）
64	"		2-c	小形，樋状剝離が横位に施される（上ヶ屋型）
65	"		2-d	素材の角に樋状剝離を加える（小坂型）
66	"		2-e	巾広短小の彫刀面が片面に片寄る（ホロカ型）
67	"		2-f	巾広短小の彫刀面が片面に片寄る（神山型）
68	"		2-g	全く裏面に横位の大きな彫刀面（砂川型）
69	"		2-h	素材を斜断する彫刀面，角ノミ形（服部台型）
70	"		3-a	刃器を素材，長い並列する樋状剝離（射的山型）
71	"		3-b	片面調整の素材をもちいた丸ノミ形（峠下型）
72	"		3-c	両面調整の素材をもちいる（オシヨロツコ型）
73	揉	錐	器	検出されている例はごく少ない
74	削器・不定形石器			各種の形状のものがある。不定形のもの多い。
75	細	刃	器	その型式差は細石核で分類される
76	刃		器	大形，中形，小形の別がある。刃器状剝片もふくむ。

(九 州)	(瀬戸内)	(中部・関東)	(信 越)	(東 北)	(北海道)
① 岩宿 I					
③ (国 府) 平 沢 良		茂 呂 砂 川 御小屋久保 池端前	杉 久 保 神 山 小 坂 伊勢見山	② 横 横 金 谷 原 東 山 成 田	
		汲 川 武 井	平 林 越 中 山		
(?) (鷺羽山)		北踊場 治部坂	④ 上 屋		⑥ホロカ沢 I
日 出 松 野 岳 福 井 4 ⑨		⑧ 藤 山 矢出川	荒 屋 中 土	⑦ 札 滑 白 滝 蘭 越 置 戸	
福井 2・3		神子柴	中 林 横 倉	⑤長者久保	立 川 大 関

- 1 中部敲打器様相
- 2 東北ナイフ形石器様相
- 3 中部ナイフ形石器様相
- 4 中部鎗先形尖頭器様相
- 5 北海道鎗先形尖頭器様相

- 6 北海道刃器様相
- 7 北海道細石器様相
- 8 中部細石器様相
- 9 九州細石器様相

密 査 結 果 の 要 旨

(主 査) 杉 原 莊 介
(副 査) 斎 藤 忠
(副 査) 関 野 雄

日本の最古の文化は、戦前までは新石器時代の文化である縄文時代の文化が知られていた。戦後は、それに先んじて、土器をまだ使用していない石器時代の文化のあることが明らかとなった。これを先土器時代の文化と称している。従来の旧石器時代・中石器時代の文化に相当するものである。すなわち、わが国の歴史も、大陸と同じように、きわめて原始的な段階から出発していたことが明白となったのである。

この先土器時代の遺跡も、現在では北海道から九州に至る日本の全域から発見され、その数も500個

所にも達しようとしている。また、その内容を見てみると性格の相違もかなり多い。この先土器時代の文化に対して、~~4~~応全体的立場にたつて、これを総括し、そして歴史的な過程として秩序づけることは、現在における急務である。しかし、それはいうべくして、なかなかの難事業である。

筆者が、この困難な仕事を、あえてとりあげたのが本論文である。論文は第1部では研究史・方法論などの基礎的な問題を取りあげ、第2部では自分の確立した方法論により、遺物の中心をなす石器の分析を行なっている。そして、なお個々の石器を1つの生活として、1つの文化としてまとめるべく、その方法の検討と実際を論じている。第3部は結論であつて、そのようにまとめられた考古学的事実について、全日本的な立場にたつて、それぞれの系統とそれらの関連、および歴史的な階梯を論じて終つてゐる。

いま、この論文を論ずるに先立ち、評者として大切なことを紹介し、そして或ることを申し添えておかねばならないと思われる。それは、この論文にとりあげられている主要な遺跡と遺物の10例前後は、筆者が自分で発掘調査した資料によることである。また、先土器時代は日本の原始時代に相当し、したがつて当時の狩猟生活や原始社会に論及すべきであるが、論文の主体が、石器の形態や型式を扱っている。これは、先土器時代文化研究の現段階においてやむを得ぬものもあるが、おそらく将来の機会を期していることと考える。

まず、当時の主体となる遺物の石器に対し、筆者は型式と形態の総合概念として、石器文化という概念を骨子として、これをまとめようとしている。おおむね妥当な方法といえよう。

かくして、筆者は日本において認められる多くの石器文化を紹介していく。そして、日本の先土器時代文化の石器の中には、ナイフ形石器といわれる形態の石器が、いかに多くの例の石器文化の中に顔を出すかを明らかにする。いろいろの形態の石器のうち、ことに筆者が主力を注いだのは、このナイフ形石器であり、あるいはこれを含む石器文化であつた。

そのため、そこで問題になるのが、ナイフ形石器の機能である。従来、この石器はその名の如く、刃器の1種とされていた。それで、敲打器以後、尖頭器の出現するまでの長期間、このナイフ形石器が主要な石器となるが、狩猟に直接役立つ生産具が何であろうかということが学界の長い間の問題であつた。これに対し、筆者はナイフ形石器を刺突具として、生産具自体としたのである。これは筆者の創見である。たしかに多くのナイフ形石器を見てみると、その中には刃器とするよりか、刺突のための穂先と考えた方がよいものがある。また、それらを直接生産具とすることによつて、前述の矛盾も解消するわけである。

筆者はこのナイフ形石器を型式的に細かく分類し、したがつて多くの石器文化について論じている。本論文において、筆者が重点としたのはここであろうし、また結果としてもここが本論文の重みとなつてゐる。

しかし、従来ナイフ形石器といわれてきたものが、すべて刺突具であろうか、評者はその中に刃器以外には考えられないものも存在することを認めざるを得ない。このナイフ形石器に対して、筆者が型式分類を行なつた綿密さをもつて、同様に形態すなわち機能の分析をも行なつたら、本論文はさらに大きな成果をあげることができたのではなからうか。

評 価

本論文に対しては、さらに希望する研究個所がなしとしないが、日本の先土器時代の文化における、複雑な石器の資料を、自からも新資料を加え、全体的な立場からこれを整理したことは、前人の行ない得なかつたことであつて、学界に対する貢献はきわめて大きい。今後、日本の先土器時代の文化の研究をする場合には、好むと好まざるを問わず、本論文を必ず参考にせざるを得ないであろう。よつて、本論文は「文学博士」の学位を授与するに足るものと判定する。

以 上